

秀歌三十首十今年の収穫

田中拓也

神の意に沿へない僕のさびしさが右舷十度の
風にくらむ 十月号・檜垣 実生

食い込んだジッパーをさあ戻そうか二人出
会った始発駅まで 安東 礼子

真つ直ぐに雨降る朝昨日まで出来なかつた事
一つ始める 黒田 郷子

今はもう笑つて読める人生を決めた時の母
の日記を 十一月号・小山 芳美

生と死の間の狭きパレスチナ十二歳にて少年
撃たる 上野 順子

ふらんすもまた異国なり住み慣れし町にひん
やり秋風ぞ吹く 十二月号・松本 実穂

淀川を渡らむとする暮れ六つに紫立ちたる対
岸の見ゆ 梅原ひろみ

山小屋に置きて来たりし我が影の大大法師泣
きてをらむか 秋山智恵子

針仕事うまき夫なり病院に切つて縫ふのを
生業とする 一月号・花 美月

秋の日の空はすこんと抜けさうで この世か
ら叔父あなくなりたり 佐藤モ二カ

若き父と幼きわれと歩みにし砂利道をけさせ
キレイと行く 白岩 裕子

ボヘミアの森想ひつつ松の花の蜂蜜の瓶の蓋
を開けたり 二月号・桐谷 文子

西梅田までの地下街串あげとうどんの匂い大
阪である 田中 和美

歳晩の町にマントをひるがへし塩鮭一尾ぶら
下げ帰る 三月号・後藤 秀彦

夜遅く帰ればポストに一枚の喪中はがきがわ
れを待ちをり 永田 千奈

日本の冬は楽しも鯛焼きの尻尾の反りのぱり
ぱりを喰ふ 栗田 ふさ

古い二人祝ひの雑煮食み得たり今年も生きむ
意識を保つ 四月号・田中 江子

元日の十三人の賑はひが元の二人となり朝寝
する 津幡 昭康

平穩が殊更さみし元旦は わたしの建てた家
にかえれぬ 志自岐百々代

職員を罵倒する声、声、声、声、声は濁流の
色をしている 五月号・加古 陽

身に覚えまことになきか「イスラム国」に集
う人々に憎悪される理由 河野 千絵

熱心にくちばし噛み合う鳩の恋わがさみしさ
もすぐに遠のく 六月号・倉石 理恵

やるせない季節が来るときさらぎのうさぎが
深い深い穴掘る 谷 ちえみ

ナアと言えばナアと答える猫だつた考え事を
いつもしていて 森岡 政子